

仏身二種説の背景

永 田 瑞

仏身二種説の内容

仏身二種説が初めていわれるのは『大智度論』においてであるが、これはつぎのように説かれている。

- ① 仏有二種身。一者法性身二者父母生身。（卷9）
 - ② 仏身二種。一神通變化身。二父母生身。（卷10）
 - ③ 仏身有二種。一者真身二者化身。（卷30）
 - ④ 仏有二種身。一者法性生身。二者隨世間身。（卷33）
 - ⑤ 有二種仏。一者法性生身仏。二者隨衆生優劣現化仏。（卷34）
 - ⑥ 仏有二種身。法身生身。（卷88）
 - ⑦ 仏有二種身。一者法身。二者色身。（卷99）
- これらの二種の仏身は、つぎの三点から区別することができる。
- (イ) 能力と形相からの区別。人間としての肉体的制約を受けている仏身と超人的な仏身。（①②③④⑤）
 - (ロ) 説法内容からの区別。○声聞法を説く仏と大乘法を説く仏。（①④⑤）○雑大乘を説く仏と純大乘を説く仏。（③⑦）
 - (ハ) 対衆による区別。○三乗の別。（④⑦）○十住の菩薩と三乗。（③）

ところでこのように二種の仏身が説き出された理由について、『大

智度論』は直接には何も説明を加えていない。したがってこの説の成立理由や動機を明らかにするために『大智度論』に先行する諸経論からの影響を調べることが必要となる。そこでつぎに『大智度論』と最も関係が深いと考える二、三の代表的な経論を取り上げて、それらの仏身に関する用語（訳語）や内容との同異をみることにする。この場合、つぎの三点からの予想が可能である。

- ① 諸経論の説をそのまま伝承した
- ② 諸経論の説を独自のものに変容させた
- ③ 『大智度論』の独創

『大品般若』との同異

『大智度論』が『大品般若』の注釈書であるという点から、これらの影響が予想されるのであるが、こゝでは用語上からも内容的にも共通点はわずかである。すなわち、こゝで使われる用語は「色身」と「法身」だけであり、その意味は、一個の仏身ないしは経巻を、その外形と内容との二方面から観察したものである。

- ① 身心を構成する五陰と仏の自内証
- ② 仏舍利と一切種智
- ③ 経巻の外形とその経巻の書写内容

これらと同様の見方は『大智度論』の中でも勿論触れられているが、仏身二種説の記述とは直接の関わりはない。したがって、仏身二種説の成立に関しては『大品般若』からの直接の影響はなかつたといえる。ただ用語の転用として考えられるものに「隨衆生身」がある。

菩薩用語の転用

『大智度論』独自の用語と見られるものに「随世間身(仏)」「隨衆生優劣現化仏」がある。この隨衆生という表現は、『大品般若』の中では菩薩のあり方としてしばしば使用されているから、これを『大智度論』が仏身をいうのに転用した可能性は大きい。

これは般若波羅蜜多を学ぶ菩薩にのみ備わる不可思議方便力である。仏でない菩薩が仏と同様の力を發揮できるのは、この方便力による。しかし『大智度論』や『法華経』では方便は第一義でないという理由で重要視されない傾向がある。したがって隨衆生身仏の能力に限界がつけられているのも当然であろう。この場合、その限界を生じさせる原因は衆生の側にあるのであって、仏の側ではないとする。このことは、歴史的事実としての釈迦仏の能力の限界に対する大乘仏教側の護教的な解釈でもある。

『大毘婆沙論』との同異

仏身の用語に関して、共通ないし類似性を持つのが『大毘婆沙論』である。またこゝではつぎに記すように「生身」「法身」の用例が多く見受けられるのが特徴といえる。

- ① 父母生身と神通力(卷30、卷135)
- ② 法身と父母生長身(卷34)
- ③ 生身と法身(卷44、卷116、卷135、卷142、卷173、卷191)
- ④ 色身(卷40、卷105)

しかしこれらの用語の意味は、人間としての制約下にある生身と、ブツダ性を示す自内証を法身というのであるから、内容的にいえば

仏身二種説の背景(永田)

『大品般若』と共通している。『大毘婆沙論』の仏身は種々の用語でいわれているが、歴史的事実としての釈尊を離れることがなかつたから、論点は単純明解である。また大乘経典は三世十方諸仏をいうのであるが、具体的な仏身としては、その経典を説く一仏が中心であるから、仏身観としては複雑な様相は示していない。それよりも、むしろ対衆衆のあり方が重要である。三乗の別をい、菩薩摩訶薩をいうのは、このことを示している。

三乗方便説の変容

仏の説法が衆生の機根に相応して行われるという発想は、とりわけ『法華経』の三乗方便一仏乘真実説に明確になされている。『大智度論』が、仏身を分類するに当って、それぞれの仏身に機根の異つた衆生を対置させ、また仏の説法内容を四悉檀や二諦説に分類統括する試みは、『法華経』の右の説からの影響が考えられる。しかしそれを仏身説として取り入れたことは『大智度論』の独創によるといえる。

まとめ

以上の観察から、『大智度論』の仏身二種説の用語及び形式が成立するについての背景として、『大毘婆沙論』と『法華経』の存在が重要であることを指摘したい。また、異質の仏身を二種身として組合せたことは『大智度論』の独創によるものである。しかしこのことは、仏と衆生との関り合いにおいて、新たに困難な問題を提出することになるのである。